

現地を訪問して思うこと。

3月11日。私は家にいて、普段と変わりのない時間に生きていた。静岡県は、地震の多い地域なので、揺れ始めたときは、あまり不安は感じなかった。ところが、なかなかおさまらない。次第に大きくなる揺れに、目の前の本棚が、動き出したとき、阪神淡路大震災のイメージが浮かんだ。まずいことになりそうだ。少し様子を見ていたが、危険を感じて家の外に出た。辺りはまるで何事もなかったように、静まり返り誰もいなかった。警報も鳴っていないし、崩れているところもないようだ。しかし、胸の鼓動が、おさまらなかつた。慌てて家に入り、家族と連絡を取り、一安心してテレビをみて…。今思うと、それからの日々は、一種のパニック状態だったと思う。日本全体が、非常事態に陥っていった。その中で、「私は、もう、その時の前には戻れない。だから、前を向いて歩き続けるしかない。出来ることは全部やろう。今、死んでしまうことも、ありうるのだから。」

そして、少し、落ち着きを取り戻したころ、「知ろうとすること」糸井重里さん、早野龍五さんの本を読んだ。福島に行こう。と思えた。そして、川内村を知った。どこにいても、水の流れる音のする美しい村。原発事故が、起きなければ、きっと知ることのなかつた村。そこで、私は、遠藤雄幸さんのようなリーダーシップのある人が、ここにいて本当に良かったと、思った。もし、自分だったら、どうだろうか。しかし、やれる自分でありたい。と思った。いつどんな事が起こるか誰も予測できない。その時、どんな本領が発揮できるかも、わからないが、頑張れる人でありたい。自分にできることを、毎日やっていく。そんなシンプルなことこそが、大切だ。一生、一所懸命に、生きようと心に誓う。「この村に、帰ってきたい。自分の子供を、川内小学校に入れたい。」と願う川内村の中学生。今の日常の、有難さを認識しなければならない。

復興ツアーから帰ってきて、お土産の笹かまぼこ、サンマの缶詰、干しシイタケ、どれも、本当においしくて、びっくりした。一度失ったものを、再建することが、どんなに大変なことか想像を絶する。自分だけのためでは、多分無理だと思う。地域の復興のため、食べてくれる人のため、人は、誰かのために生きる時、一番頑張れる。私は、今回出逢えた人たちから頂いたたくさんの"お土産"を、"おすそ分け"することが、今の自分に出来ること。そして、知ろうとし続けること。この目で見て、感じて、学んで、そして、発信していきたい。